

日本人大学生が苦手とする対人場面の検討

—計量テキスト分析を通じて—

澤海 崇文^{1,2} 稲垣 勉^{1,3} 澄川 采加^{1,4}

¹ 教育テスト研究センター ² 流通経済大学 ³ 京都外国語大学 ⁴ 泉台小学校

これまでに日本人の大学生が苦手とする対人場面について研究されているものの、先行研究におけるサンプルが偏っていたり、昨今の感染症拡大状況でコミュニケーションの様相が変化してきたりしていることを鑑みると、現代の大学生がどのような対人場면을苦手とするのかを検討する必要があるといえる。本研究では今を生きる日本人大学生が苦手とする対人場면을抽出するという目的のもと、オンライン調査を実施した。大学生 163 名を対象として自由記述式で各自が苦手とする対人場面の回答を求めた。計量テキスト分析の結果、授業内でのグループワークの場面、部活やサークルで飲みの誘いを断る場面、アルバイト先でシフトの変更を頼む場面、家族同士で喧嘩が生じている場面、インターネットで知り合った人とやりとりする場面などの場面が頻繁に挙げられていた。今後はこのような場면을工夫してトレーニングするようなコンテンツが求められる。

キーワード：ソーシャルスキルトレーニング、対人場面、大学生、計量テキスト分析

1. はじめに

人は高校から大学へと進学するにあたり、活動する社会的状況が多様化する。受講する授業を選択できるようになり、アルバイトやサークルといった活動の幅を広げ、多種多様な対人場면을経験することになる。また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、以前とは異なる対人的やり取りを経験するようになった。本研究では、そのような対人場面の中で日本人大学生が苦手とする場면을計量テキスト分析によって明らかにする。

日本人大学生が苦手とする対人場面について検討を加えた研究はこれまでに複数実施されている。藤田 (2010) は女子短期大学生を対象として子供とのやり取りに着目した検討を行っており、2名の学生がトレーニングを経て子供への苦手意識を克服するプロセスを報告している。渋谷・林 (2009) は大学生が苦手とする大学教員の特徴を調査し、授業が分かりにくい、細かい、厳しいといった大学教員の特徴を大学生が苦手としていることを報告している。後藤・大坊 (2003) は関西地方の大学生に自由記述してもらったデータをテキストマイニングによって整理した結果、大学生は概して、初対面の人との会話、年長者との接し方、顔見知り程度の人とのコミュニケーションに苦手意識を抱いていたと報告している。

以上の先行研究は、大学生が様々な相手との対人場面で苦手意識を抱くことを明らかにしているが、特定のサンプルのみを対象としており、一般的な日本人大学生が苦手とする対人場면을明らかにしていない。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大によって、以前と比べて人間関係が大きく変容したという議論もあり (石田, 2022)、現代の日本人大学生がどのような対人場면을苦手とするかは以前とは異なる可能性がある。したがって、本研究では、日本全国の大学生を対象として、各自が苦手とする対人場면을回答してもらい、そのデータを計量テキスト分析によって分類する。

2. 方法

2.1 参加者 163名の大学生(男性75名,女性85名,その他1名,未回答2名。年齢 $M = 21.74$ 歳, $SD = 3.11$ 歳, 範囲 18–44 歳)が本調査に参加した。

2.2 質問項目 大学生の苦手とする対人場面の自由記述を求めた後藤・大坊(2003)を参考にし,本研究では対人場面を5種類(大学授業,部活サークル,アルバイト,家族,その他)に分け,参加者に以下の教示文で回答を求めた。大学授業については「あなたが大学の授業関係の人づきあいにおいて,コミュニケーションに戸惑ったり,苦手と感じたりするのはどんなときですか?5つの場面をお答えください。これまでに経験したことについて,相手との関係やその場の状況,具体的な発言など,できるだけ詳しくお答えください。」という文言を使用した。下線部の記述を変更することにより,他4種類の場面についても回答を求めた。

2.3 手続き クラウドワークスにて調査参加者を募集した。クラウドワークスとは,日本全国でワーカーが登録されており,クラウドワークス上で依頼者が投稿する仕事をワーカー各自が見つけて応募するシステムである。本研究では投稿した募集要項にて本研究の概要を記述し,研究参加者がインターネット上で調査に回答できるURLを記載した。調査回答ページはクアルトリクス(Qualtrics)で作成した。調査参加者には謝礼として400円を支払った。なお,調査ページには本論文で報告していない項目も含まれていた。

3. 結果および考察

3.1 データ処理 自由記述データをチェックし,すべてにおいて「なし」といった回答を記述した者,30歳以上の参加者のデータを削除し,最終的に141名のデータが残った。後者に関して,Arnett(2004)によると18歳から29歳は成人形成期(emerging adulthood)と言われ,親密関係,仕事,世界観といった領域でもがく時期であり,30歳以上の参加者はたとえ大学生であると申告していても成人形成期には当てはまららないと考え,本研究の分析には含めなかった。

3.2 計量テキスト分析 分析にはKH Coder(樋口,2020)を使用した。計量テキスト分析とはテキスト型のデータから情報を抽出して可視化するもので,様々な分析が行える。本論文では,自由記述データの中で多く出現していた語を確認する抽出語リスト,語と語の結びつきを可視化する共起ネットワークを報告する。

3.3 抽出語リスト 5場面ごとに抽出語リストを集計し,出現頻度10位までをまとめると表1のようになった。各場面で登場する人物や行う活動が多く記述されていた。

表1 場面ごとの抽出語リスト

大学授業	部活サークル	アルバイト	家族	その他
授業	先輩	バイト	親	人
人	後輩	仕事	家族	友達
話す	飲む	社員	自分	自分
グループ	メンバー	シフト	話	会う
自分	入る	先輩	聞く	近所
グループワーク	参加	入る	話す	言う
発表	合う	お客	言う	話す
知る	活動	店長	苦手	話
言う	練習	悪い	父親	同級生
教授	声	教える	母親	苦手

